

ライン・ヴェストファーレン石炭シンジケート をめぐる社会的批判と経営組織

1893-1914

—反独占研究と経営史研究を架橋する1つの試み—

東京大学経済学研究科 修士2年

矢島シヨン

shaun.yajima@gmail.com

発表の流れ

1. 対象とテーマ
2. 先行研究の整理と問題点
3. 修士論文のアプローチ
4. 問い
5. 史料
6. 構成
7. 第4章の内容の紹介
8. まとめ
9. 反独占研究と経営史研究の架橋に向けて
10. 参考文献一覧

次ここ！

修論の大枠
(最初の5分)



第4章の紹介



まとめと展望

1. 対象とテーマ

○帝政期ドイツ(1871-1918)という時代

- ▶ドイツ統一(1871)→重化学工業化と農工逆転(「高度工業化」)
- ▶前半の大況期(1873-1896)と後半の好況期(1896-1914)

○ライン・ヴェストファーレン石炭シンジケート(1893-1945)

- ▶1893年、ルール地方に成立。法的契約に基づく石炭業カルテル
- ▶同地方の石炭の90%以上、ドイツ全出炭量の半分以上を支配
- ▶1893年から1914年(WWI)までが分析対象

○社会的な注目と批判

- ▶産業・家計を超え、幅広い用途に消費された石炭。必須財
- ▶新聞や議会上の注目や懸念、バッシング

2. 先行研究の整理と問題点

○独占・金融資本論研究から経営史的研究へ

- ▶(1)独占資本研究：大野(1956)、Nussbaum(1966)、田野(1985)他
- (2)経営史研究：Peters(1981)、Roelevink(2015)、Böse(2018)
- ▶(2)は経営史料を用い、石炭シンジケートの行動と組織を丁寧に解明

○反独占・反石炭シンジケート運動という研究課題

- ▶Nussbaum(1966)、Blanch(1973)、田野(1988)他
- ▶(1)の時代、独占と規定→利害対立の政治・社会的表出が視野に
- ▶行政、議会、中小工業の利益団体が主な史料分析の対象

○上記の反独占研究の限界

- ▶反独占運動のアクターは中小工業のみ
- ▶「運動→帝国議会→政府」という権力発動・規制のチャンネルのみ考慮
- ▶結論：帝国議会が国制上弱く、規制導入を迫れず(反独占運動の挫折)

3. 修士論文のアプローチ

○権力発動・規制のチャンネルとしての「国民的公共圏」

- ▶ 19世紀末の新聞流通の激増→国民的公共圏・世論の登場
- ▶ 世論が批判やスキャンダルを通して力を行使(←メディア社会史研究)
- ▶ 帝国議会:新聞との相互作用の中、公共圏の一部を構成
→「コミュニケーション空間としての帝国議会」論(←議会史研究)

○中小工業を超えた家計消費者の反シンジケート利害

- ▶ 帝政期:生活物資価格をめぐる家計消費者の集団・対抗意識の形成
(←消費者史研究)
- ▶ 石炭シンジケート批判の産業間の部分利害対立を超えた国民的広がり



この2つの視角を踏まえて反独占研究を更新。その上で、
経営史研究の蓄積へと接続することを目指す。

4. 問い

① 新聞と帝国議会の相互作用の中で形成される公共圏において、石炭シンジケートに対する批判は、いかなる特徴と広がりを持ち展開したのか。



② そうした社会的批判を、石炭シンジケートはどう認識し、価格形成と販売・流通という2つの重要な意思決定領域において、自らの市場行動と組織形成に反映させたのか。

5. 史料

○社会的批判側の史料

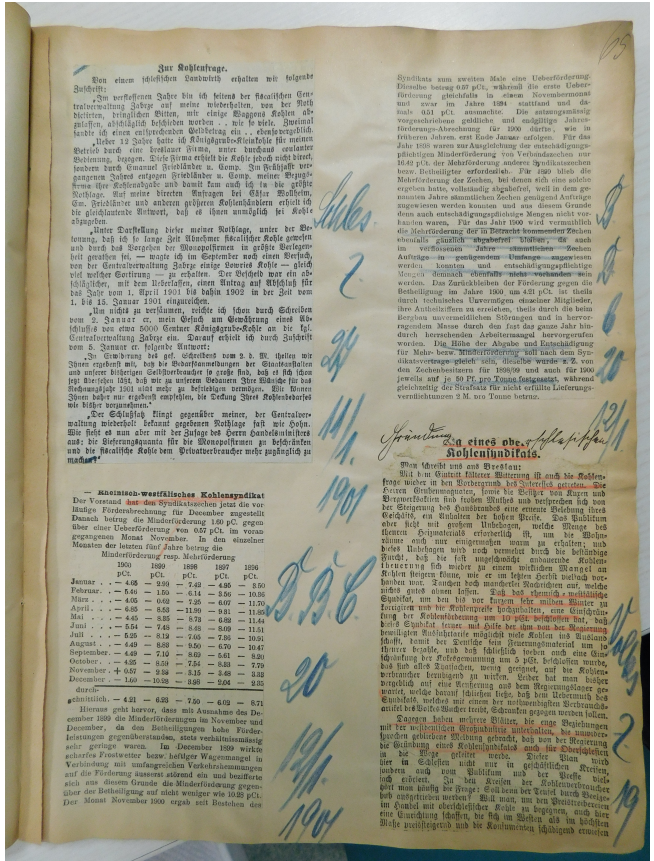
- ▶ 農業者同盟の新聞切り抜き史料(次ページ写真) ※熊谷(1976)
- ▶ 帝国議会議事録(オンライン史料)

○シンジケート側の豊富な経営史料

- ▶ 主要意思決定機関の議事録、石炭商との交渉・契約文書
- ▶ 取締役会の月次・年次経営報告書
- ▶ 内務省のカルテル調査、同時代文献、カルテル専門誌



一方で広範な社会的批判を効果的に再構成しつつ、他方で石炭シンジケートという経営主体の内部にわけいって、批判の受容と批判への対応を分析することができる。



帝国農業者同盟の新聞記事切り抜きコレクション1893-1945、(約 1万冊)
連邦アーカイブ・ベルリンにて

6. 構成

第1章 序論

第2章 石炭シンジケートの価格決定と社会的批判

第3章 石炭危機下の新聞・帝国議会・石炭シンジケート

第4章 石炭シンジケートの流通統合・統制と社会的批判

第5章 結論

▶3章：社会的批判を分析する章。石炭不足・価格高騰で新聞・議会の批判と石炭シンジケートの相互作用が結晶化した1900年「石炭危機」の局面を詳細に分析することで、事件史的に批判の特徴を解明。

▶2章、4章：石炭シンジケート側が、批判のどの側面を重要視し、対応したかをみる章。石炭危機以前の時期は価格決定(2章)、以後は流通コントロール(4章)が、分析を行う意思決定領域。

発表の流れ

1. 対象とテーマ
2. 先行研究の整理と問題点
3. 修士論文のアプローチ
4. 問い
5. 史料
6. 構成
7. 第4章の内容の紹介
8. まとめ
9. 反独占研究と経営史研究の架橋に向けて
10. 参考文献一覧

~~修論の大枠
(最初の5分)~~



次ここ！

第4章の紹介



まとめと展望

7. 第4章の内容の紹介

7-0. なぜ流通統合・統制を取り上げるのか？

○Böse (2018)による注目

- ▶ 石炭シンジケートの経営史的研究の最も重要なモノグラフ
- ▶ シンジケートの本質＝市場利用コスト節約のための流通統合

○社会的批判の集中とそれへの対応

- ▶ 石炭シンジケートの石炭商コントロール問題＝当時、社会的批判が最も集中したトピックの1つ
- ▶ シンジケート側もそうした批判の重要性を認識



社会的批判に注目して反独占研究を更新し、経営史研究の蓄積と接続する上で有効。

7-0. 第4章の構成と主張

7-1、7-2→1900年以降の石炭シンジケート批判と流通統合の関係を見て行く前史。

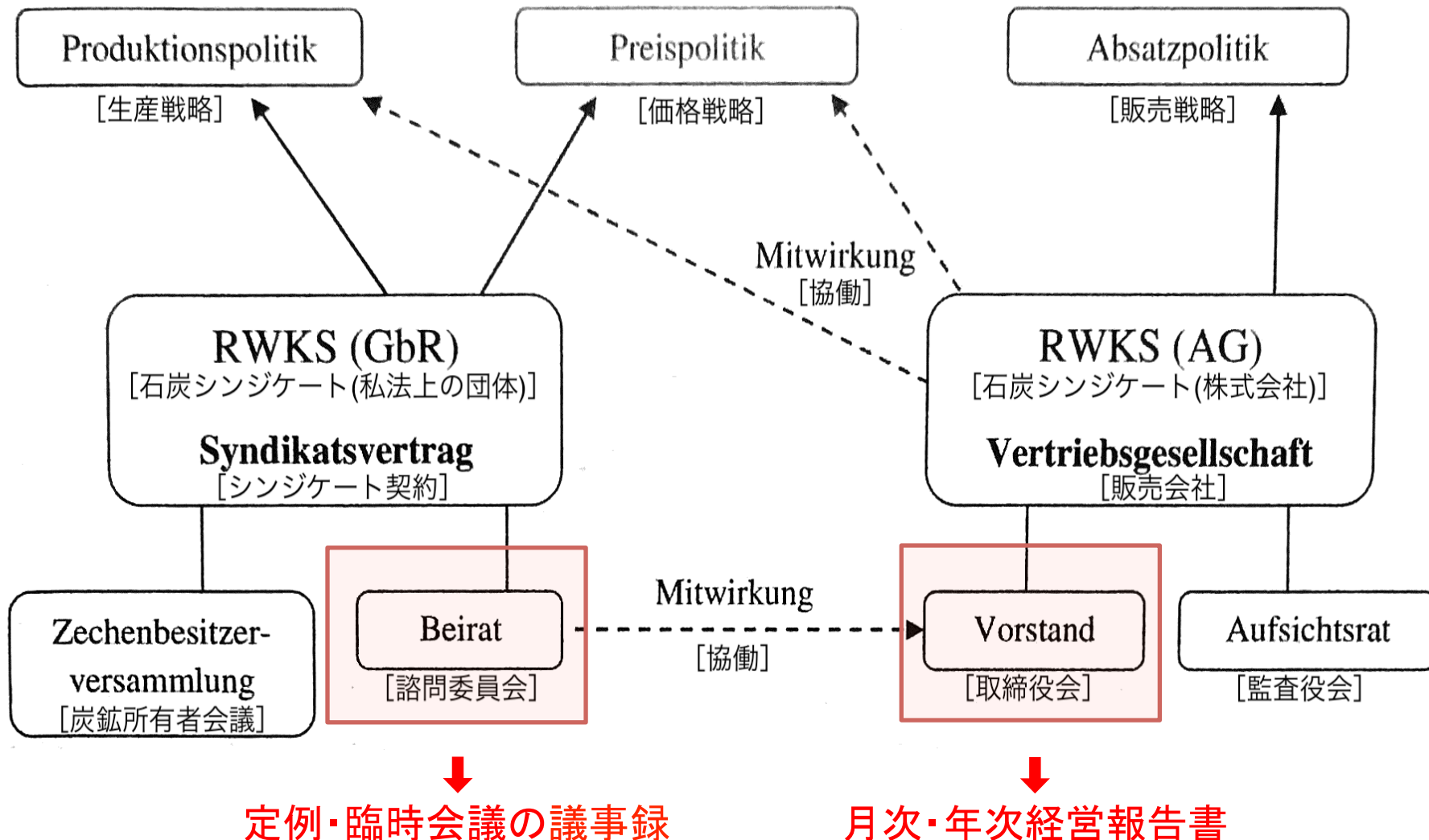
7-3、7-4、7-5→1900年の石炭危機以後、石炭シンジケートが、社会的批判に反応して、流通面で対応した3つの局面を、時系列順に見ていく。



第4章では、石炭シンジケートが流通統合・統制を進める動機として、石炭シンジケートが石炭商の行動をコントロールできていない社会的批判があったことを主張したい。

<図1> 石炭シンジケートの組織図

出典: Böse (2018)、S. 79。ただし[]内の和訳はスライド作成者による。



7-1. シンジケート成立と販売一本化(～1893年)

○70、80年代＝商人優位の時代(→グラフ1)

- ▶100近いルール地方の炭鉱の激しい競争・過剰生産
- ▶石炭商の買い叩き→長期的な価格低迷

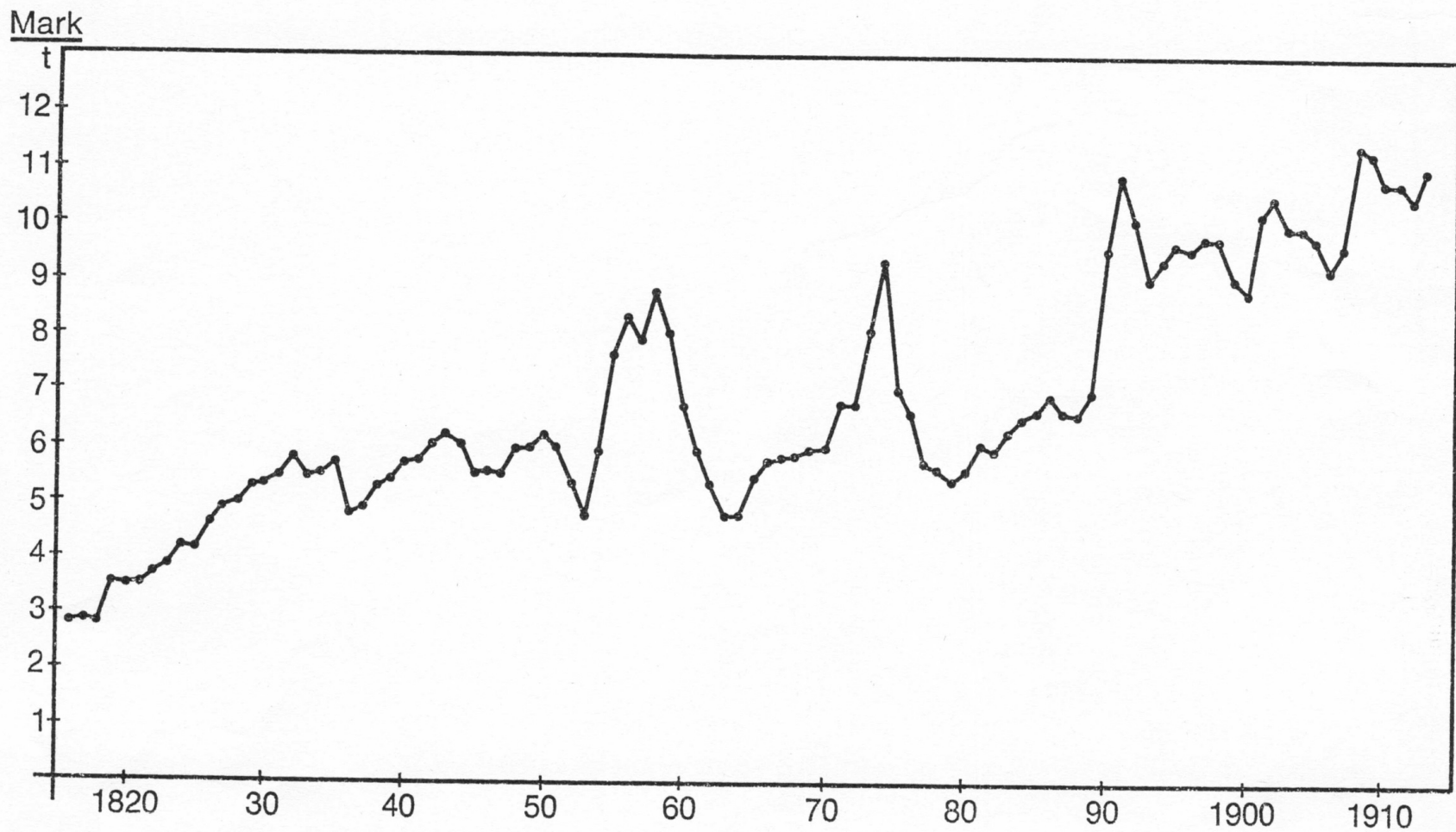
○石炭シンジケートの結成(1893年)

- ▶70、80年代、地区・商品別の販売組合結成努力
- ▶1893年、石炭シンジケート成立。98炭鉱が参加し、ルール炭の90%以上を支配。

○シンジケートへの販売一本化(→図)

- ▶参加炭鉱のすべての商品が、シンジケートを通じた販売に移行

<グラフ1> ルール炭の実質価格推移 1813-1916



出典: Holtfreirich (1973)、S. 21。

7-2. 直接供給と地区別指定商事会社の二重体制へ (1893～1900年前後)

○販売地区の区分とナンバリング(→図2)

- ▶参加した炭鉱の供給地域を改めて区分け(地区1～29)

○大口顧客への直接供給拡大

- ▶1897年以降、40%前後で安定→残り60%は卸売商経由に
- ▶鉄鋼業(主にルール地方)、鉄道当局、発電所など

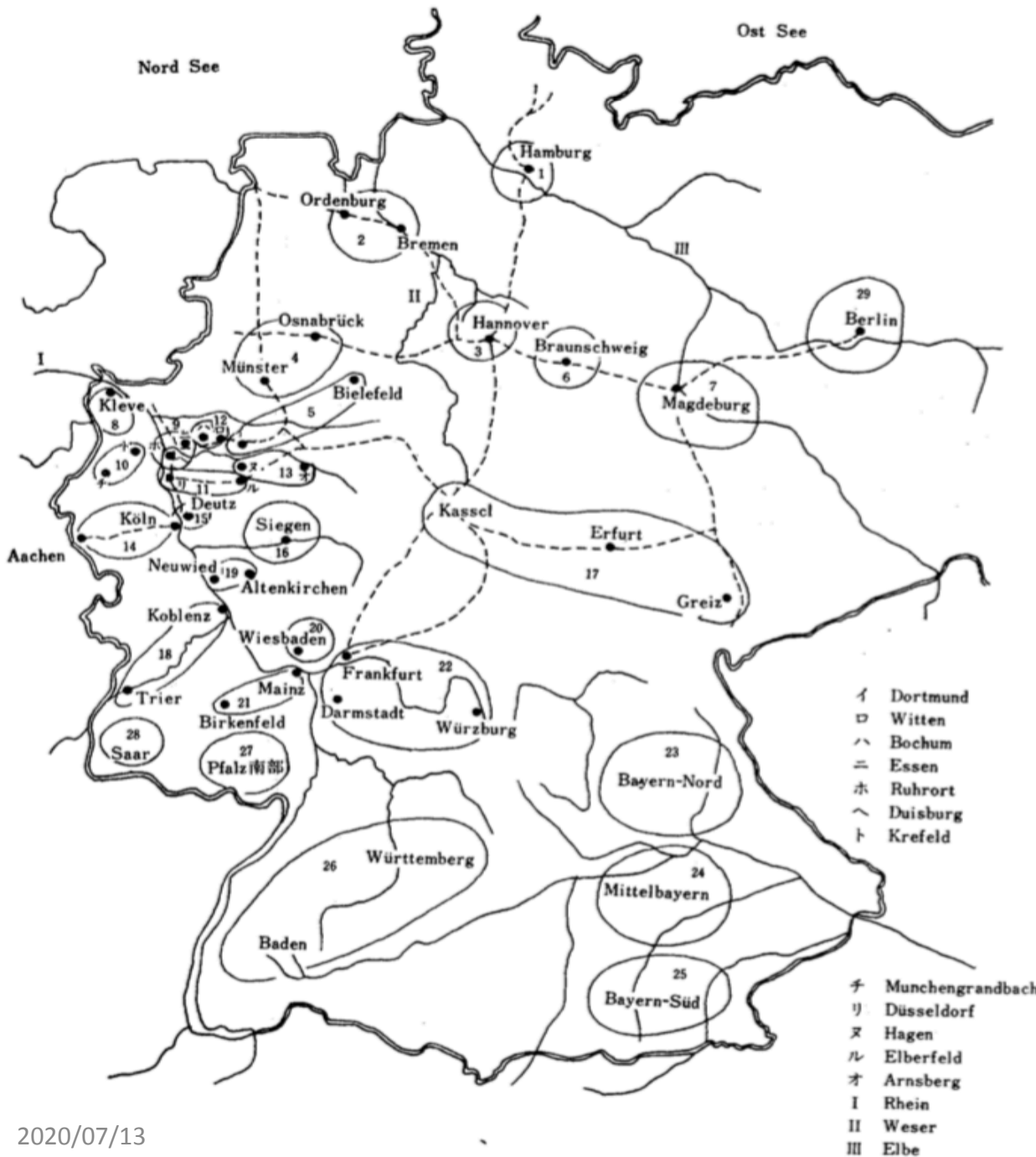
○販売地区別の指定商事会社設立(→図3)

- ▶(数)地区ごとに既存の卸売商(数～数十社)を1つの指定商事会社に糾合。地区内部での取引に限定させ、独占的販売権を付与。
- ▶単年の厳しい契約条件によって、商事会社をコントロール

<図2>

石炭シンジケートの 販売地区図

出典：田野(1985)、484頁。

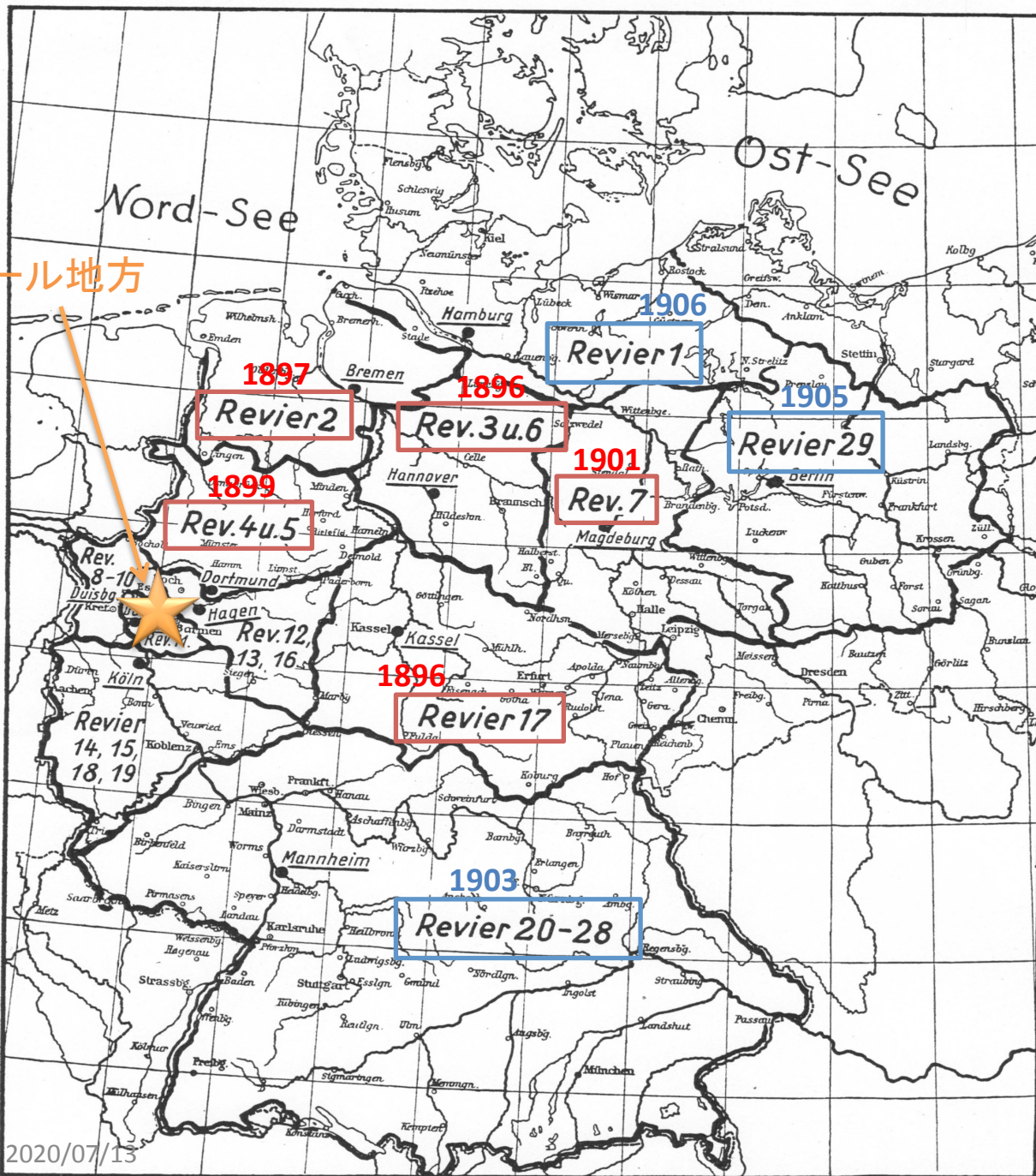


<図3>

各指定商事会社の
販売地区割り当て
及び設立年

出典：Tielmann(1940)、S. 18。

ルール地方



商事会社設立の2つの波

□ : 第1波(1896-1901)

□ : 第2波(1903-1906)

※図内の年号は、各地区の
商事会社の設立年

7-3. 石炭危機下の石炭商コントロール問題(1900年)

○1900年の石炭危機

- ▶ 1900年に起こった石炭不足・価格高騰をめぐる社会不安
- ▶ 家計が石炭を消費する冬を前に、年の後半にピーク
- ▶ 石炭シンジケートの行動に対する激しい新聞・議会上の批判

○石炭商の価格つり上げ、退蔵行為への批判

- ▶ 石炭商(特に卸売)の独占や価格つり上げ行為が1つの論点

○シンジケートと石炭商の関係が問題に

- ▶ シンジケートの石炭商に対する統制・契約形態に批判が拡大

7-3. 石炭危機下の石炭商コントロール問題(1900年)

○1900年前半期のシンジケートの懸念・対応

- ▶商人への批判が石炭シンジケートに向けられることへの懸念
- ▶4月の経営報告での言及、直接供給拡大の検討、商人への通告

○1900年後半期の批判ピーク時のシンジケートの対応

- ▶石炭商との契約に再販価格を適切なものにすることを明記
- ▶この契約条項を議会での答弁に持ち込んで、対策をアピール



主張：石炭危機下の社会的批判が、流通過程のコントロール問題をシンジケートに強く意識させた

7-4. 商事会社(石炭商)の資本・人的支配強化 (1903～1906年)

○1903年のシンジケート契約更新

- ▶石炭シンジケートの他社に対する買収・資本参加が可能に

○Kohlenkontorへの資本・人的支配

- ▶南ドイツ市場(地区20-28)担当の商事会社、1903年設立
- ▶シンジケートが資本参加と営業部長・監査役会代表の派遣
→理由: ①市場把握・安定、
②石炭商の行動がひき起こす「新聞闘争(Pressefehde)」、「怒りの嵐
(Sturm der Entrüstung)」を回避 ※Böse(2018)に依拠
- ▶Berlin(地区29、1905設立)、Hamburg(地区1、1906年設立)での
商事会社設立でも資本参加



主張: 石炭危機以来の社会的批判が、商事会社への契約を
超えた人的・資本的支配を強める1つの要因になっていた。

7-5. 新聞の商事会社批判と内部論争 (1909～1912年)

○1909年Thyssenの問題提起

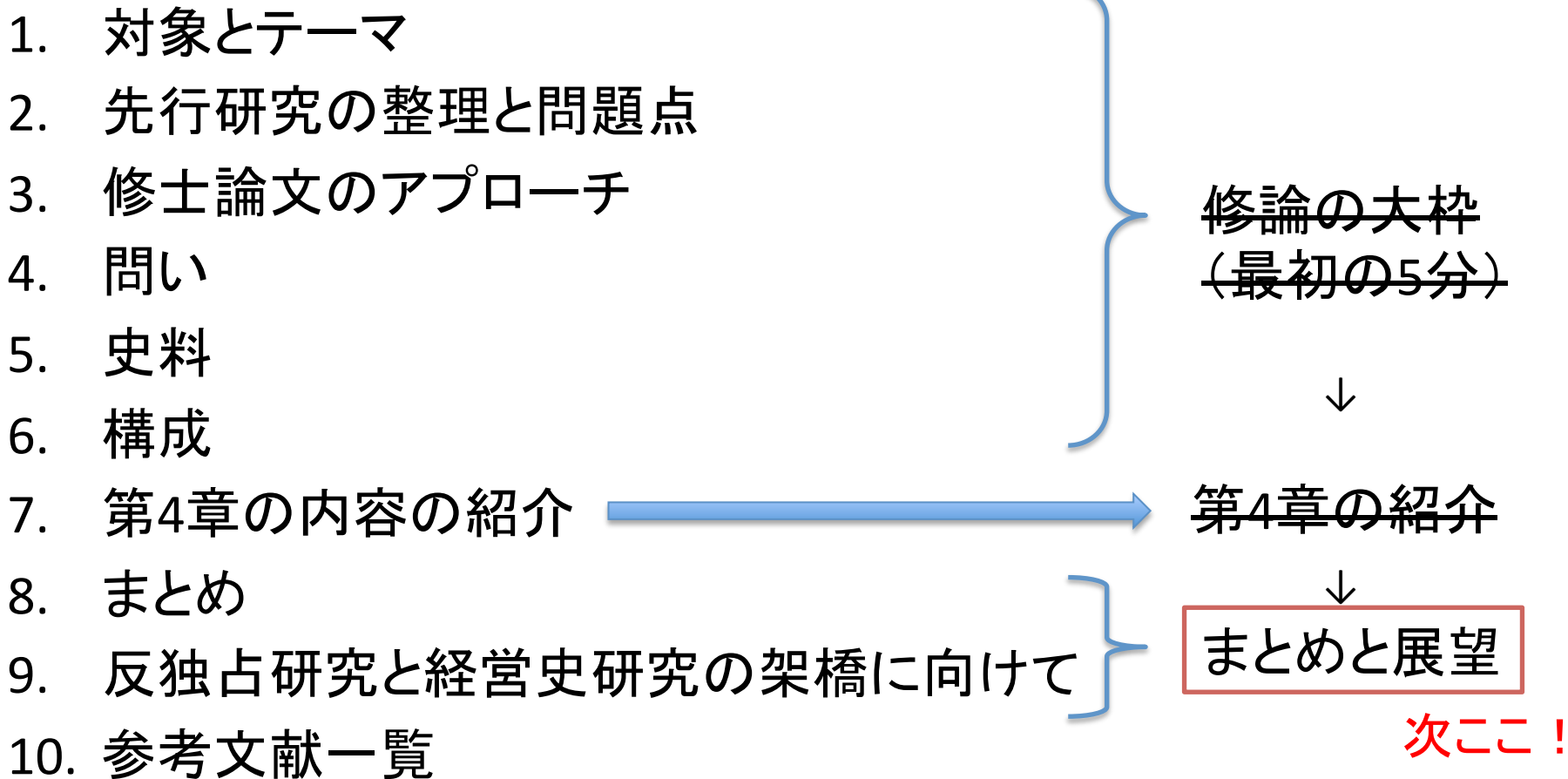
○委員会での検討

○契約支配の強化へ

主張:

以上で、第4章の内容の紹介終わり

発表の流れ



8. まとめ

① 裾野の広い家計消費者利害を背景に、新聞と議会が相互作用の中で形成する言論空間において、石炭シンジケートに関する社会的批判が展開した。

② 新聞・議会上の批判というチャンネルを通じて、反シンジケート運動は、石炭シンジケートを規制・抑止する一定の力を持った。

③ こうした批判は、価格形成や流通組織に関して、近年の経営史的研究が指摘する石炭シンジケートの経営行動・組織形成の特徴に対して、1つの要因となっていた。

挫折したとされる反シンジケート、
反独占運動の再評価

経営史的研究に対し、考慮すべき経営環境の1つを指摘

9. 反独占研究と経営史研究の架橋に向けて

○「反独占」というテーマへの関心の再興

John (2012), “Robber Barons Redux: Antimonopoly Reconsidered” (BHCの会長就任演説が基)

Langlois (2018), “Hunting the Big Five: Twenty-First Century Antitrust in Historical Perspective”

Lamoreaux (2019), “The Problem of Bigness: From Standard Oil to Google” など

○Johnのチャンドラー批判と“historicising” antimonopoly

▶ John (2012) : チャンドラー以降、同時代人の巨大組織と経営者をめぐる“antimonopoly critique”の問題が「歴史のゴミ箱」へ

▶ 再研究する必要。→しかし、“historicise”する形で(良い/悪いではなく)



このJohnの提起を受け、チャンドラー以降の組織研究を経て、改めて独占批判を研究するとするならば、具体的にどのような形をとるのだろうか。

一連の石炭シンジケートに関する組織形成の緻密な研究を引き受けながら、改めて、反石炭シンジケート・独占というテーマを“historicise”する上での方法と意義はどうあるべきか。逆にこの事例から何か示唆はできるか。

10. 参考文献一覧

[日本語]

大野英二『ドイツ金融資本成立史論』有斐閣、1956年。

熊谷一男「帝国農業者同盟プレッセ・アルヒーフについて」『経営論集』、24(1)、117-129、1976年。

田野慶子「独立成立期ドイツの石炭商業：ルール炭坑業と卸売商との関係について」
『社会経済史学』、50(4)、472-495、1985年。

田野慶子「第一次大戦前ドイツにおける石炭シンジケート批判の展開：中小資本の動向を中心に」
『土地制度史学』、30(3)、18-35、1988年。

戸原四郎『ドイツ金融資本の成立過程』東京大学出版会、1960年。

10. 参考文献一覧

[ドイツ語]

Böse, Christian, *Kartellpolitik im Kaiserreich. Das Kohlensyndikat und die Absatzorganisation im Ruhrbergbau 1893-1919*, Berlin 2018.

Blaich, Fritz, *Kartell- und Monopolpolitik im kaiserlichen Deutschland. Das Problem der Marktmacht im deutschen Reichstag zwischen 1879-1914*, Düsseldorf 1973.

Holtfreirich, Carl-Ludwig, *Quantitative Wirtschaftsgeschichte des Ruhrkohlenbergbaus im 19. Jahrhundert. Ein Führungssektoranalyse*, Dortmund 1973.

Nussbaum, Helga, *Unternehmer gegen Monopole. Über Struktur und Aktionen antimonopolistischer bürgerlicher Gruppen zu Beginn des 20. Jahrhunderts*, Berlin 1966.

Roelevink, Eva-Maria, *Organisierte Intransparenz. Das Kohlensyndikat und der niederländische Markt 1915-1932*, München 2015.

Tielmann, Paul, *Die Sybdikatshandelsgesellschaften des Rheinisch-Westfälischen Kohlensyndikats in der Volkswirtschaft*, Essen 1940.

10. 参考文献一覽

[英語]

- Bittner, Thomas, “An Event Study of the Rheinisch-Westphalia Coal Syndicate”, *European Review of Economic History*, 9(3), 337-364, 2005.
- Burhop, Carsten and Lübbers Thorsten, “Cartels, Managerial Incentives, and Productive Efficiency in German Coal Mining, 1881-1913”, *The Journal of Economic History*, 69(2), 500-527, 2009.
- John, Richard R., “Robber Barons Redux: Antimonopoly Reconsidered”, *Enterprise&Society*, 13(1), 1-38, 2012.
- Lamoreaux, Naomi R., “The Problem of Bigness: From Standard Oil to Google”, *Journal of Economic Perspectives*, 33(3), 94-117, 2019.
- Langlois, Richard N., “Hunting the Big Five: Twenty-First Century Antitrust in Historical Perspective”, SSRN Working Paper, 2018.
- Lübbers, Thorsten, “Is Cartelisation Profitable? A Case Study of the Rheinisch Westphalian Coal Syndicate, 1893-1913”, Discussion Paper Series of the Max Planck Institute for Research on Collective Goods, 2009.
- Nocken, Ulrich, “German Cartels through the lens of transaction cost theory”, Feldenkirchen, Wilfried, and Hilger, Susanne, and Rennet, Kornelia (Ed.), *Geschichte-Unternehmen-Archive. Festschrift für Horst A. Wessel zum 65. Geburtstag*, Essen 2008.
- Peters, Lon Leloy, “Cooperative Competition in German Coal and Steel 1893-1914”, Ph.D dissertation, Yale University, 1981.